
世界の利、僕の利

青龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の利、僕の利

【Nコード】

N8170E

【作者名】

青龍

【あらすじ】

今の世の中金がすべて。そんな風に言えたのは、今から約3000年前のこと。世界が核兵器によって『人』と『人でない人』が存在してしまった時の物語

序章：プロローグ

今の世の中金がすべて。

そんな風に言えたのは、今から約3000年前のこと。もう西暦も数えなくなつて約1000年。

世界は、過去のことを気にしなくなった。その理由は過去に起きた戦争が、原因だ。

今から2000年前、世界から石油が少ししか取れなくなった。少しの石油を巡つて世界戦争がおきた。

世界の国々全部の発展途上が終わつていたため、すべての国が核兵器を乱用した。

その結果、その戦争は一日で終了した。

核兵器のせいで、たくさんの人が死に、たくさんの人が強力すぎる放射性物質により『人ではなくなった』。

大地が荒れ、植物が枯れた。

強力すぎた放射性物質を『未来への手』と。

この戦争は、今ではこついわれている『革命』と。

そう誰かが呼びはじめた。

進みすぎた技術のせいで、『人』自体貴重になつてしまった。今で

は、『未来の手』よって人はさまざま

な形に変わっていった。ローマ神話出てきた二つの顔のヤーヌス。

妖精と称されるエルフなど、さまざま

形に変貌してしまった。変わっていく人々は、『これは、人類進化のための革命』とまで言った。

姿が変わっていくになつていくにつれて、だんだん脳の細胞の数が減っていった。これの理由は、今だ証明されていないが、『変化による被害』と称された。しかし、変化するにしたがつてそれぞれ属性を持つ様になった。これを俗に『神が与えてくれた力』と称した。

人は、そんな『未来の手』によつて変わった人を『魔獣』や『魔人』と呼んだ。勿論、人は『魔獣』や『魔人』を愚弄し、卑下した。

愚かで醜い野獣だ。

と言つて。

『魔獣』や『魔人』の反感を買い、『神が与えてくれた力』を使つて人間を滅ぼそうとした。

しかし、同時に『魔獣』や『魔人』が神の反感を買った。ある日、神が一人の人物に『ある能力』を授けた。

それは、『言霊』の能力を呼び覚ますもの。その能力は、字の意味を『心そこから』理解した時発動する能力。『言霊』を封印するための文字を『封字』といい。封字は、『巻物』にかかれ、使うものが『心そこから』理解した時に書かれた文字を読み上げると、言霊の能力が発動され、巻物に書かれたことが『現実化』される仕組みだった。

抵抗できる手段ができてしまった人は、『魔獣』や『魔人』と戦争を起こした。
これは、『魔獣』や『魔人』と人の生き残るための活殺自在の無駄な戦争

『海底撈月戦争』

と呼ばれた。

人と『魔獣』や『魔人』の無駄な戦争は100年も続いた。

この戦争が1000年前。今は冷戦状態が続いていつまた、あの戦争みたいのがおきてもおかしくない状態だ。

神は、『魔獣』や『魔人』に刃向かう方法を作った。一体何が目的かは、今の世の中には、分らない。

序章：祈祷

この世はなぜ生まれたのだろう。

なぜ、生き、苦勞して生きていき、死ぬのだろうか？俺には、よく分からない。俺は、何が目的で生きているのだ……。この世界は、こういう疑問が充満している。世界は、どこに向かっているのだろう。そんな質問は、誰も答えられない。なんせ、自分じゃ何もできないから。そう、何も……。

俺の名前は、祈祷 きとう。昔の先祖は、色々長い名前だったが、『人』における部族差別がなくなった今となつては、廃止になった。これは、いい事なのだが、俺にとってはどうでもいい。

俺は、この『名のない都市』と言う名の街に住んでいる。名は、あるが、ないので複雑だ。

俺は、この街でハンターをしている。ハンターというのは、『食材集め』ということがおもな仕事だ。

金の価値が無くなつてしまった現代において、報酬は、『巻物』『情報』さまざまなものを買う。

クライアントは大抵、『巻物』を作る『封力師』か、コックぐらいだ。

俺は、いつも通り仕事場に出勤する。俺の仕事場は、『普通のオヒイス』みたいなところらしい。

社長は、超長寿の『エルフ』と言う部族だ。革命後から年をとって

ないらしい。まじかよ。

社長曰く、「『革命』が、起こる前の世界みたいな感じた。昔が、懐かしい。」だそうだ。

『魔人』と呼ばれる部族は人間社会に残った部族は多い。一例として、『人』に一番近いエルフなんかは、未だに差別もつけず残っている。エルフと人の大きな違いは、寿命だ。エルフの寿命は、『2千年』らしい。

普通ならもう死んでいるはずなのだ。が、こうして生きていることは、微笑ましいことかもしれない。

「おい、祈祷。仕事がはいつたぞ。」

微笑んでいると社長からご氏名を受けた。

「また、俺っすか。」

「ああ、お前だ。うちの社員は、俺入れて4人しかいないんだから、二人が出払ってしまったらお前しかないだろう。」

社長が笑顔で話してくれた。うちの会社は、社員が4人しかいない。ていうか、『巻物』を読めるのはこの街に俺らしか居らず、毎日忙しい。

「で、今回の以来依頼は？」

「今回の依頼は、『魔物』退治だ。」

「げ、本当ですか？」

「二人きりでうそをついても仕方がないだろう。」

「ま、まあ。」

『魔物』退治とは、『魔獣』が自分の力に飲み込まれてしまい暴走してしまたのを止めるという作業だ。

「なんで、そんな難しくて珍しい依頼がこんなところに来るんですか？街のストライプは、どうしたのですか？」

「ストライプが何とかならないから、俺らに頼むのだろう？」

世界は、『海底撈月戦争』以来国という大きなまとまりが無くなり、『ストライプ』という戦闘になれた兵隊を育成する機関を各地域で作った。

それと同時にストライプは、街を守るのを目的に作られた組織でもあり、一つの街に40人ほど送られる。ま、簡単に言えば、戦闘のプロだ。

「今も現場で戦っているらしいから、さっさと行って来い。」

「なんで、こんなことに・・・。」

俺たちは、ハンターと名乗っているが、実際は身体能力は並か、それ以下だ。体力ぐらいならつけられる。

が、頑張ってもストライプみたいな瞬時に反応できない。そんな奴が、現場に行ってもあんまり動けないと思うのにな。俺は、『巻物』を三つ装備して会社を出た。

現場に行くと、20人ぐらいのストライプスが戦っていた。手が真っ赤に染まっている者。足が変な方向に曲がっている者。色々な人が、『やばい状態』だった。奥では、まだ戦っているらしいな。

これは、大物だ。

俺は、足がすくみながらも器用に冷笑してしまった。

奥に進むと、『ネメアの獅子』と言う名の『魔物』が暴れていた。

奴は、名の通り『獅子』なのだが、皮膚が硬化し、どうやら自慢の剣が弾かれダメージを与えられてないらしい。それで、『あの』惨事か。なんてざまだ。

「我が名は、祈祷。そちらを援護にきた。」

「おおお！」と声援が起きる。誰かが走ってくる。そして、俺に一

人の若い大男が話掛けてきた。

「我が名は、ライジ。ここの指揮官だ。」

こいつか、『あの』さまの原因は。俺は、殺気の帯びた目で彼を見上げていった。ライジは、黒人でまさにアメリカ人を思わせる感じの人だった。

「今から、奴を倒します。5分俺に近づけないで下さい。そして、『言霊』の封印を解くことができます。」

『巻物』の力を発動させるには、『巻物』に書かれてある封字をすべて読まなくてはいけない。封字は、『お経』というもののぐらいらしいので、読み終わるのは一苦労だ。

「わ、分かった。」

それを聞いて俺はどこかの木の一番上に登り、読み始めた。木に登るのは、雑音をできるだけ遠ざけるためだ。

「よし！皆、ハンターが『巻物』を呼び終わらせるまで、もたせるぞ！」

「おおおお！！！」

指揮官がいうと兵士の士気があがった。彼は、この部隊のムードメーカーらしい。

「グオオオ！！！」

ネメアの獅子の動き急にキレのある動きになった。

「グアアアア！！！」

そう言つて、自慢の爪を使ってストライプスを切り込みはじめた。

「があああ！」

「！」

ライジが隊員の名前を叫びながら切られた隊員に近づく。感高ぶっているのか、よく聞き取れない。

近づいたせいで、ネメアの獅子がライジを狙う。そして、ネメアの獅子が手を高く上げて仕留める用意をする。これは、避けきれない。

「隊長、危ない！」

俺は、隊員の声を聞いて目をそらした。

グシャツ。

「・・・ぐ！」

「タイン！」

ライジは、隊員が盾になってくれたお陰助かった。でも、盾になった隊員は、ライジに何かつぶやいて絶命した。あの刀みたいな爪に切り込まれるのだ。ひとたまりもない。

「てめえ！いい加減に・・・」

そう言つてライジは剣を構える。・・・しかし、ライジは突っ込まなかった。いや、突っ込めなかった。ライジは、急に膝について気絶した。多分だが、これが奴の

奴の『神が与えてくれた力』。

「解！」

俺は、準備を整えた後、ネメアの獅子が、いるところにいどうしながら、必死に奴の『神が与えてくれた力』

について考えた。相手を気絶させるのか？殺すのか？一体なんの能力なんだ？

「とりあえず、ついてから考えよう。」

そうつぶやいてから、1分間無心になった。

ネメアの獅子のところに行く、すでに前線で戦っていたストライプのメンバーは、隊長を除いていなかった。

絶命したか　　食われたか。

「く、前線には、20人もいたんだぞ！」
俺は、思わず唇を噛んだ。

俺は、覚悟を決めて。奴の目の前にたつた。それは、いけなかったかもしれない。
今から、戦うネメアの獅子を見てゾツとした。奴は、爪についていた血をおいしそうになめていたからだ。

「『魔獣』と『魔人』の元は、人間だ。」

そう言って保護しようとする人間がいるが

人間のかけらもない。

そう思いながら『巻物』の力を出す。『巻物』は、人のイメージによって能力を発揮する。例えば、俺の持っている『巻物』は、水を基調としている。そのため、イメージによって何にも形を変えるこ

とができる。

『巻物』を理解しないと、『巻物』を発動できない理由はこれだと思っっている。

「水は、最強の能力」

って社長は、言う。どうだか、分からないが少なくともそこら辺の能力よりマシなのかも知れない。

「グアアアア！」

そうこうしないうちに、ネメア獅子が自慢の爪で攻撃してきた。暴走中は、頭に血が上った状態。そんな奴の攻撃なんて聞かない。余裕を持ってバックステップで避けた。

とりあえず、状況を整理しよう。・・・ここは、森。木や草などがたくさんあって『隠れやすい』。奴から逃げるのは、簡単だが今回の指令は暴走を止めるかまたは、殺害だ。俺は、草木の茂みに隠れて作戦を考えることにした。

さてと、・・・どうやって、どうやって攻撃してダメージを与えるか。問題は、あの硬い鎧みたいな皮膚。

剣を通さなかった。・・・とりあえず、俺は『巻物』を発動させナイフをイメージする。そうすると、周りに出てきた水がナイフになった。これが、イメージの『大切さ』なのかもしれない。とりあえず、移動しながら投げてみる。

「はっ。」

キン

そんな音がした。聞かなかったことを物語る。どうやら、奴の皮膚は金属でできているらしい。

多分、こっちに気がついただろう。そんな気がしたので、奴の目に水を掛けるイメージを膨らます。そして、奴がこっちを向いた瞬間水を目に掛けた。

「キャン。」

そんな声が聞こえ・・・！弱点発見！目だ、目が弱点だ。俺は、移動しながらドリルをイメージさせる。『巻物』を発動させ、手を軸にドリルを作る。「よし！」といい、ダッシュで奴の目がけて走った。

しかし、俺は弱点を知った瞬間油断した。奴は、『神が与えてくれた力』を使えることを。

ゾクッ。この表現が正しいだろうか。一瞬だった。一瞬だけ奴の目と目が合った。その瞬間底知れぬ恐怖が全身に走った。うお。この無言の重圧。

今にも食われるかと思えるぐらいの殺気。ライジが倒れるのも納得だ。これは・・・これは

ヤバイ。

俺の本能がそう伝える。今にも倒れそうだ。奴は、ゆっくりと歩いてくる。立っていらなくなる。

膝をつく。手、背中、頭からすごい量の冷や汗が出てくる・・・怖い。怖すぎる。何がこんなに駆り立てている？俺は、弱点を知っているんじゃないか・・・そう、弱点を。

そう思い奴に、精一杯の力を込めて近づこうとした。が、できなかった。恐怖は、俺の四肢の自由さえ効かなくしていた。足が震える。手があがらない。考えることができない。俺は、このまま動けないまま死ぬ。

「うわっああああああ！！！」

そういつて、俺はしゃがみこむ。そして奴は、笑ったような顔をした。そして、アッパーをするように

「ガアアア！」

そういつて奴が俺の肩を切り裂く。

「がああああ！！！」

ち、奴は、この戦いを楽しんでやがる。元の人間の本能は、健在なことか。

血が大量にでてくる。死が待っているのかもな。

死。

その言葉が頭をよぎった瞬間、俺は、何も考えられなくなった。・このまま死ぬ。俺は、まだ死にたくはない・・・。

奴は、俺の近くに来てを上げる。まるで人を殴るかのように。俺は、急に涙が出てきた。

俺の人生が終わりを告げるのを感じたかのように・・・。

奴が、手を振り下ろしてきた瞬間、横から誰かに押された。

「よけろお！」

その声が俺を暗闇から引き戻す。

「あ……！」

横を見ると、気絶していたはずのライジがおきていた。

「が、はあ。」

そう言っ、血を吐く。体を見ると、横腹がえぐれたような傷ついている。重症だ。

「どうやら、助けられたな。」

「ぐ、そんなこと言っ、てねえで……早く・奴を倒しやがれ。」

「ああ。もう倒す。」

そういっ、て、『巻物』の力でライジを運びながら移動する。

「これが……お前の能力か？」

ライジがたずねてくる。

「ああ。『水を制御する能力』だ。」

「これを使っ、ていても……代償とか……は無いのか？」

「代償？」

「何の力を手に入れるにも何かしらの代償は……つき物だ。そういうことね。何かしらの代償か。」

「そうだな、集中力をすごく使う。あとは、……ない。」

俺は、傷の痛みにも耐えながらも俺の命を助けてくれたライジに恩を返さなければならぬ。

ま、手が無いわけではない。が、もし失敗なんてしたらライジは死んでしまうだろう。

俺もライジも精神的にも肉体的にも限界に近いかもしれない。そんな奴に複雑な作戦なんてできるのか？

……ここは、シンプルな作戦しかない。うまく、もう一つの『巻物』の攻撃が成功すれば何とかなるかも知れない。

「ライジ一瞬でいいから奴の気をひきつけてくれないか？」

「・・・分かった。」

「頼む。」

「・・・了・解。」

そういつて、ライジは、獅子へ突っ込んだ。

「うおおおお！！！」

声に反応して、奴はライジをみる。そして、獅子はライジの方に目標を定めた。奴はまるで、

ライジを哀れみの目で見ている気がした。まるで、「自暴自棄になった人」を見るような顔で。その後、奴は笑ったような気がした。

『獲物を仕留められる喜び』のように。

その時だけ、奴は油断した。多分だが、奴は俺の存在を忘れている。目の前の飯にありつけるよろこびから。

「やあ！！！」

そしてその時を無駄にしないため俺は、『巻物』の力でつくった剣の形にしたやつ奴の目に放り込む。

「ギアアアア！！！」

見事命中！うまく入ってやつは苦しんでいる。俺は、奴が苦しんでいる間に3つのうちの一つの『封印』の『巻物』を取り出す。時間を無駄にしないためできるだけ早く封字を読む。

「解！」

そして、その言葉が引き金のように獅子の周りの地面から無数の鎖が出てくる。これが、『封印』の力だ。『封印』といっても動きを止めるだけである。

「キュウウウウ。」

そういう声をあげて、獅子が落ち着く。暴走がとまったようだ。ということとは、どうやら、封印は成功したようだ。この『封印』は、相手の動きをとめるまでに時間がかかる上に、逃げられやすい。

とてもではないが、動いている相手に『封印』の攻撃を当てるのは、不可能。

今回のように弱点を突いて弱らせるか、普通にダメージを与えて弱

らせるかしてからしかつかえないらしい。

「・・・終わった・・・のか？」

俺とライジは、とりあえず木の幹に寄りかかって座る。

「ああ。」

「よ・・・かつ・・・た。」

そう言っただけライジは倒れた。

「え？」

バサ。ライジがおれの体に寄りかかってくる。

「おい。まだ死ぬな！ やつと、生き残ったのにしぬなんてゆるさねーぞ！」

ゆすってみただけ、ライジの出血がひどい。急いで病院にいかないと死にしまう。

そう思い、3つ目の『連絡』の『巻物』を出す。これは、ほとんどの人が使える簡単な巻物の『装幀巻物』と呼ばれるものの一つだ。これが初歩中の初歩であるため、こういう名前がつけられた。

『連1。』

この『巻物』封字はこれだけ。3つまで指定した公共の場所と連絡できる。

「ここは、名のない都市、病院一棟。」

「二人、急患だ。」

「了解しました。そのまま、力をだしつづけてください。」

それから30秒もしないうちにジェット機に乗った救急の隊員がきた。

「さ、乗って。」

そういられ、俺たちはそのジェット機に乗った。『巻物』の出現おかげで『進みすぎた科学』が後退した。

それは、いい事でもあるが悪いことでもあった。いい事というのは、『巻物』を制御しようとするために昔の技術が使われ、エネルギー

を最小限しか使わないようになったこと。悪いことは、『巻物』を使い今俺の乗っているジェット機などの機会の性能を百倍以上に上がってしまったこと。これにより、より戦争時に被害が出やすくなった。

「さ、病院に着きましたよ。」

そう隊員にいわれた。ジェット機から降ろしてもらった。隊員に運ばれている俺は、病院のマークを見てため息をついてから意識を手放した。

序章：祈祷（後書き）

こんにちは、作者の封雷光です。

この小説は、現代から3000年後のお話ですが、あんまり現代とかわりません。国というまとまりが消え、言葉が統一された世界です。地方で国の文化は残っているという設定も加えといてください。質問等ございましたら、感想のところにお書きください。

更新は、半月ごとくらいですが、世界の利、僕の利をよろしく願います。

序章：始まり（上）

あれから一週間経った。ライジは、全治二ヶ月となったがまたストライプスに復帰できることになった。

「祈祷、生きているか？」

そう言って入ってきたのはうちの社長だ。俺はその後、病院に搬送され全治二週間を言い渡された。

「生きてます。死に掛けましたが。」

「・・・それは良かった。」

「社長、今の間はなんですか？」

俺は、最高の笑みで聞いた。

「・・・。」

なぜ黙るんだ、社長？

「仕事はいつ復帰できるかわかった？」

「3週間ぐらいと聞いています。」

「ほお、給料は当分・・・。」

なるほど、あの『魔物』退治の報酬を渡したくないのかあ。

「わかりました。あ、社長。」

「何かね？」

「『魔物』退治の報酬は下さいね。」

「・・・。」

なぜ、黙るんですか、社長？

「さて、そんな話は置いて。何のためにきたんですか？お見舞いなんて柄じゃないでしょう。」

社長は、社員を大切にしない。その証拠に、依頼の内容とそれ相応の報酬となればどこにでも社員を投入する。この前、うちの社員のキジが魔物がうじゃうじゃいる森に投入した。

「・・・わかつていたのか。」

「はい。」

「最近他の街で『魔物』の暴走が頻繁に起きるようになった。」
「・・・なに？」

「い、今なんて・・・？」

「だから、『魔物』の暴走の頻度が上がったんだ。それもかなりにな。他の街で犠牲者が大量にでている。」

「！！！！」

あんなのが全世界で？そんなことになったら・・・。

「でだ、お前のようなハンターを全世界から徴収されることになった。理由は、いわなくても分かるよな？」

「・・・このままだと、人類が滅んでしまうから。」

現在の人類は、10億人程度。その中でハンターは、1万人以下。街は一万ぐらいある。数字を見て分かるようにハンターのいない街がある。そんな街が、『魔物』の暴走を止められるとは思えない。つてことはハンターがいない街は壊滅状態。人がもつと減っていく。

「正解だ。今から起こる事くらい予測がつくだろう？」

「『魔物』の暴走をとめる。」

「または、『魔物』を全員殺す。」

社長が言った。

「・・・そういう考えもありますね。とりあえず、どこに徴収されるんですか？」

「旧ブラジル地区、オーストラリア地区、南アフリカ地区だ。」

「『魔物』のすくない地域ですね。」

「ああ、これ以上ハンターが死なないようにするためだ。」

「・・・。」

『革命』のとき落とされた核兵器は、北極に落ちた。『未来の手』に、近ければ近いほど人の形が無くなっていく。そのため、北に『魔物』が集中し、南に人間、赤道あたりには、『魔人』が集中した。いつでればいいですか？」

「明日からだ。この街も時期に破棄される。」

「・・・なに！」

「この地域は、旧日本地区。『魔人』が多いとはいえ、いつまた『魔物』が暴走するかわからねえ。」

「・・・。」

「しょうがないか・・・。」

「いいか、会社にある12の『巻物』をどんな事があっても守るんだ。」

「わかった。」

今会社にある『巻物』は『装幀巻物』を除いて12ある。あるが、その中の4つは『究極の巻物』と社長が呼び、封印している。

「もう皆で準備を終わらせている。必要なものだけいえ。お前の家から持ってくる。」

「そんなものはない。」

俺には、家族がいない。理由は簡単。父も母もハンターで『魔物』退治のとき一緒に死んだからだ。一人っ子だった俺はいく当てもなく二人が働いていた会社に引き取られた。その後、その恩返し社長が会社で働いてる。

「・・・そうか。」

次の日、早朝に病院を抜け出すと3人の会社の同僚が玄関にいた。

「おはよ、祈祷。」

「おはうございます、祈祷君。」

「早いな。」

彼らを順に説明すると、一番最初に話しかけてきたのは一番若い京子だ。彼女は、長い髪の純日本系の顔立ち。社長から言うと「巫女の服を着たら似合う女」らしい。因みに、俺も純日本人で「てんぱー」というものらしい。

次に、話しかけてきたのは見るからに優しそうな顔をしているリンだ。彼女は髪が茶髪で目が蒼いところを見ると色々な人種が混じっ

ているらしい。最後に話しかけてきたのは、親友で幼馴染のキジだ。彼は、リンの妹で、髪の色や目の色がそっくりだ。俗にいう「いけめん」というものらしい。

「・・・まったく、社長のいつている言葉はまったく分からない。」

「おはよう、皆。」

「・・・傷大丈夫なのか？」

「そうキジが話しかけてくる。・・・ん？」

「・・・大丈夫だ。というか、痛みがない？ということだ？」

「そういつて包帯を取ってみると」

「！傷がなくなっている。」

「「「！！！」」」

「一体何が・・・。」

「皆さん待つてください。」

そんなこと考え得ていると声が聞こえた。ん、この声は？声の方を向くとライジが立っていた。

「僕も連れてつてはくれませんか？」

「・・・だめだ。傷が治っているならともかく、傷が深かっただろう。傷を負ったものにこられても足手まといだ。」

「それが・・・傷がなくなっているんです。あなた同様に。」

「・・・。」

「どういうことなんだ。なぜ、俺やライジの傷が無くなっているんだ・・・？」

「戦力が増えるのは歓迎だ。誰かは知らんが連れていこう。」

「そう考えているとキジがそう切り出した。」

「おい！そんなこといつて・・・！」

俺が反論する。

「良いに決まっているだろう。その身体つき、兵でもやっていたのだろう。」

「はい。ストライプスの隊長をやっていました。」

ライジが淡々と答える。

「ほお、益々好条件ではないか。」

「でも……。」

「はいはい。でも、だって禁止だ。そんなこといつていたら話が進まない。簡単に奴が戦力になれそうなら連れて行けばいい。今見てどう見ても使えるし、戦力になるだろう。」

「……。」

「沈黙は肯定とみとめる。」

「……っ。じゃ、聞かせてくれ。何で一緒にいきたいんだ？」

「……『友達』が危険なところに行くのを見送るだけなんて嫌なんだ。」

「おいおい、俺とお前はまだ一週間の仲だぜ？」

「……それでも、『友達』が危険なところに行くのを黙ってみているのは嫌なんだ。僕の友達は、『魔物』が暴走した時に僕が友達と言える人は全員死んだ。あの時、俺は何も出来なかった。……いや、しなかった。自分が死ぬのが怖くて。動けず、震えていた。皆が死んでいくのを見て、とても自己嫌悪に陥ったよ。……僕はもう嫌なんだ、あんなことは。もう自分だけ黙って見ているなんて出来ない。」

「……。」

「繰返すが、沈黙は肯定と認めるぞ？」
キジが確認する。

「……。」

「じゃあ、よろしくな。俺はキジだ。」

「よろしく、僕の名はライジ。ストライプス第50番ライジ曹長です。」

そう言つて特有の敬礼をする。これは、地方の軍とストライプスと間違えないようにするためと俺は考える。

「よろしくお願いしますね、ライジさん。私はリンです。」

「よろしく！俺は、京子。」

「こら、京子ちゃん。俺じゃないでしょ？」

「いいじゃん！気にしない気にしない。」

「はあ、まったく。」

いつもの様にリンと京子でコントを繰り広げた。

「ま、そんなことは置いといて。皆、俺の『巻物』持ってきてくれた？」

「ああ。ほらよ！」

そう言つて、キジが二つの『巻物』を投げてきた。

「ありがとう。」

そう言つて『封印』と『水』の『巻物』を受け取る。受け取ったら俺はいつものように装備する。装備といつても、服についている専用のポケットにいれるだけだが……。

「じゃ、いきますか。」

そうキジが言う。

「おう。」

そう言つて俺等は、歩き始めた。

もう戻つてくることの無い街。そう考えると自然に涙が出そうになる。街を歩きながら色々な思い出が甦つてくる。良い思い出も……嫌な思い出も。他の街に行ったことないので、不安と好奇心でいっぱいだった。「どんな風何だろう」とかぐらいしか思いつかなかつたけど。

そんな事考えているとキジが話しかけてきた。

「……この街ともお別れだな。」

「ええ、そうね。色々なことがあったわ。祈祷が木から落ちて大怪我して……。」

「そうそう、祈祷が大昔のホラー映画見て怖いって大泣きしたり……。」

「そうだね。まったく、祈祷したら……。」

「ストップ。皆さん俺の悪い思い出しか思いつかないの？」

「うん。」

「・・・。」

三人ともハモリやがった。しかも、ライジが笑いこらえてるってどういうこと？お前助けるよ。

「ま、そんなことはどっかに置いといて。本当に色々な事があったわね。」

多分皆同じ事を考えているのだろう。俺とリン姉弟と京子は親がない。行方不明か死んでいるかのどちらかだ。

リン姉弟俺と同じく親が死んでいる。リン姉弟の親が病弱で、母親がしんですぐ後追うように死んだらしい。

問題なのは京子で。ある日会社前に京子が倒れているのを俺が見つけた。見ると傷だらけで何があったのか聞けないくらいだ。実際今も聞けていない。

「ほらほら、みんなで白けた顔しないの。張り切っていこう！」
と京子が皆を元気つける。

「そうだな。」

とキジも続ける。

「じゃ、いきましようか。」

とリンも続く。

「じゃ、行きますか。」

そういった瞬間。

「じゃあな、お前ら。」

つて後ろから声が聞こえた。が、皆振り向かない。それが、『礼儀だからだ。言い訳だろが何だろうが無視する。悪い思いばかりしてきた。だが、そんな日々でも小さな幸せがあったとしても大切だった。』

「・・・死ぬなよ。」

俺たちにとっては、彼はとても大切な『親』だった。

「な、キジ。俺たちどこに向かうの？」

俺は、旅立ってすぐ、キジに質問した。

「空港に向かって飛行機をチャーターしてオーストラリア地区に向かう。ま、オーストラリアに着かん限り次の目的地が分からない。」

「え、社長に聞いてないの？」

「おう。」

自信満々に言われてもなあ。

「ま、オーストラリアの空港できけいいさ。」

なんと能天気な・・・。

「・・・わかった。でもさ、この森通らなきゃだめ？」

「ああ。この森通らないと大分遠回りになる。」

「なになに？ 祈祷びびってんの？」

「どんまいです、祈祷君。」

「お前ら俺に一斉攻撃やめろ。」

おいおい、なんでライジが笑ってるんだ？ せめてこらえろよ。話を戻すが、俺らの目の前にはライジと戦った森が広がっていた。

「一日歩けば夕方には抜けられるから大丈夫だ。」

キジが補足する。

「とりあえず、いくか。」

「そうですね。」

「ごぉー！」

「・・・。」

「どうした、ライジ？」

キジが聞く。

「いや、なんでもありません。」

そう叫んだ瞬間。皆ライジから一斉に離れて『巻物』を開きながら『封字』を読む。

「は、お前らの『読む』時間は前回の戦いで把握している。後3分程度でつくからこいつと遊んでろ！」

そういったあとライジが剣を抜く。

「いいか、リンと京子は『読み』続ける。俺と祈祷でライジをとめる。読み終わったら今から来る敵を始末してくれ。」

キジが一旦読むのをとめてに三人に指示を出す。三人が皆をみて頷く。キジは続ける。

「祈祷、ライジに何があった？」

「ライジと俺は一週間前に『魔物』退治の依頼でネメアの獅子と戦ったんだ。多分操っているのは奴だ。」

「・・・。」

キジが黙り込む。だが、なぜライジが操られているんだ。何が原因なんだ？そう考えているとライジが俺に突っ込んできた。

「おらおらおら！！しねえ！！！」

大振りで攻撃してきたので軽く避けた。

「当たるかつ！」

前転で避ける。

どかぁーん。

気のせいだろうか。変な音がした。

「お、おい、祈祷。クレーターが出来てるぞ・・・。」

キジが震えながら言った。見ると直径5cmほどのクレーターが出来ていた。

「ま、まじかよ。早めにとめねえと、こちらが危ない。いくぞ、キジ！」

「おう！」

そう言って二人が挟み込むような陣形をつくる。

「「覚悟、ライジ！」」
見事にハモった。

「「解！！」」

俺とリンは、長い長い封字を読み終わり、敵の討伐に向かう。

「京子ちゃん、あなたと私が唱えた『巻物』は属性から言って真逆なの。だからあわせないと打ち消しあっちゃうわ。」

リンの言う通り、俺の『巻物』は『風』。リンの『巻物』は『土』だ。土は、風の通りを塞ぎ、風は土を風化させる。

「わかってる。こんびねーしょんって奴をすればいいんでしょ？」

「社長の言葉を借りればそういうことね。」

「ガルルルルル！！！！！」

「「！！！！！」」

二人で喋っていると、俺とリンの前に戦うと思われる敵が現れた。

硬そうな皮膚で全身が覆われていて片目が塞がっている。

一見、獅子^{ライオン}に見えるが太陽の光に浴びるたびに光るところをみると普通じゃないことが分かる。

「じゃ、いくわよ、京子ちゃん。」

「わかった、いつでもいいぜ！」

「こら、いつでもいい『わよ』でしょ！」

そんな雑談しながら戦い始めた。

序章：始まり（上）（後書き）

どうも、作者の封雷光です。

今回の話は下手したら一万五千字超えてしまいそうに二回に分ける事にしました。長くて申し訳ございません。

さてと、今回のお話ですが、急にメンバーが増えてしまつて混乱する方もいる（と思いたい）のでキャラの自己紹介を一話につき一人していきたいと思います。

じゃあ、まずは主人公（？）を

名前：祈祷 19歳

性格：おつちよこちよい、ほとんどのことに面倒がる。

友達のこと第一に考え人の死を見るのを人一倍嫌う。

まだか、いじめたくなるオーラがある

外見：純日本人。背が高く、なにげかつこいいが本人

が気付いてないので普通。

序章：始まり（中）

「キジ！どうにかならないのかよっ！」

バックステップを使って、うまくライジの攻撃を避ける。

「なるか。」

キジもキジで独特のステップをつかって避けた。

ドコーン！

すごい大きな音が響き渡る。その音を聞いて動物たちが逃げていった。

「くつくつく、流石に手も足もでないか！ぐふふ、人間など弱い下等生物なのだ！」

ネメアの獅子に操られているライジが、天を向いて不気味な笑いをした。

「そんな黒人の器で言われても・・・。」

キジは、若干不慣れなようだ。ま、俺もなれないが。

「このまま、防戦一方だと確実に長引くぞ？」

「そのようだ。」

「しかも、則られている状態とはいえ元は人間の身体だ。あんなこととしていたら・・・。」

「だが、攻撃したらライジにダメージが残るぞ？」

「じゃあ、どうすれば！」

「リンと京子に任せるしかないだろう。」

「・・・何にも対策が立てられないのか。」

結局、人任せになってしまったらしい。

「頑張ってくれ。」

そう願うしかなかった。

「今よ！」

「OK！」

合図と同時に攻撃する。

「遅い！」

しかし、後一步と言うところで避けられる。私の『土』はコントロール重視に対して、京子ちゃんの『風』はスピード重視。

「もー、京子ちゃん。もっと、遅くしてよ！」

私の『土』は、京子ちゃんの『風』のスピードについていけない。

「無理だよ！これでも精一杯スピード落としてんだから！」

「ふふふ、味方同士でいがみ合ってどおする？」

ネメアの獅子が片手を挙げながら突っ込んできた。近づいたた振り下ろす気だ。

「く、やあ！」

私は、地面に手をつけて周りの土を盛り上げて京子ちゃんと一緒に守る形にする。

「流石リンだね。コントロール抜群じゃん」

「この壁は一分も持たないわ！急いで次に。」

「わかってる。」

そう言つて、目を瞑って集中する。私は細長い塔を作るイメージを頭の中に描く。

獅子が、刺さるような大きな塔。

「準備OKだよ、リン。」

「分かったわ！」

目を開き壁に触る。そして、爆発するイメージを描く。すると、見事に壁が全方へ爆発した。

「キャン！」

そんな声をだしながら

「お、可愛い声出せるじゃん！」

京子ちゃん、頭の上にためていた大きな風で出来た玉を獅子に向かって投げる。しかし、獅子もあたらないように立とうとする。

「逃がさないわ！」

さっきのイメージを呼び戻して、奴の四肢に貫かせる。が・・・

「な・・・！」

貫くどころか、『土』をあげたのにもかかわらず削られてしまった。それほどまで奴の皮膚は

「硬い・・・！」

奴は当然とした様子で、すぐさま立ち上がって避ける。

「どーやら、リンの『土』は一切効かないらしいね。」

「そうみたいね。」

奴の攻撃を避けながら戦う。『巻物』を使うのに馴れているとは言え、正直長時間使えない。

「取り合えず、作戦考えないとまずいぞ。」

「そうね。いつも通りという訳には行かないみたいね。」

考えて、私。こういう時こそ、頭を使わないと。

「どおするよ？」

京子ちゃんがキツそうに尋ねて来る。

「そうね、取り合えず弱点を見つけないと。」

視線を獅子に向ける。硬そうな皮膚で全身が覆われていて片目が塞がっている。一見、獅子に見えるが太陽の光に浴びるたびに光る皮膚。ん、待つて。　　そういえば。

「京子ちゃん、祈祷君はこの敵と戦ってたっていったわよね？」

「え？うん。」

「・・・。」

つい、ニヤリと笑ってしまう。

「私の賭けに乗ってくれる？」

「いいよ！」

京子ちゃんもニヤリと笑った。

「じゃあ、まず私たちを『風』の上に乗って移動すうわよ。」

「そんなこと出来るわけないぜ?」

「京子ちゃん、その言い方おかしいわよ?」

「え?」

「じゃあ、まず太い板をイメージして。」

「うん」

京子ちゃんがイメージしている間に私は、長細い大きな壁獅子にぶつけ、距離を取る。

「く、小賢しい!我にそんな攻撃きく思っているのか!」

獅子は、だんだん苛付いて来ているようだ。

「できたよ。」

「なら、『風』でその板を作つて。」

頼むと京子ちゃんの周りに『風』が集まる。

「何をしたいのか分からんが、ふざけるな!!!」

獅子が突っ込んで来る。

「出来たよ!」

「じゃあ、乗つて!」

そう言つて私と京子ちゃんは、『風の板』に乗る。獅子が木を使つてすばやくこっちにくる。

「上がつて!早く!」

「分かつた!」

ひゅうう!!変な音になる。が、見事、上へ上がる事が出来た。

「こんな使い方があるなんて・・・。」

京子ちゃんはびっくりしている。

「きっと馴れればもう少し小さくても上がる事が出来るようになるわ。さてと、次行くわよ!」

「次?」

「そう、次よ。」

そう言つて、ネメアの獅子が私たちを探しているうちに作戦を京子ちゃんに伝えた。

「キジ、流石に疲れてくるな。」

「同感だ。」

キジと俺は、長時間の防戦に耐えていた。武道派ではない俺らにとつて結構キツイものだ。一発当たれば重症の攻撃だし、当たり所が悪ければ即死の攻撃だ。そんな状態の中に放り込まれたら、どつと疲れるだろう。

「なあ、やっぱこっちは気絶させるまでの攻撃したほうがいいんじゃないか？」

俺は、息を切らしながらキジに話しかける。

「だな。」

彼も、エネルギー消費は最小限に押さえたいらしい。

「うるせえええ!!」

ライジが、俺に標的を定めリアットを仕掛けてくる。もともと、ストライプスという軍関係の仕事で鍛えられている。それに加え、『魔獣』に操られて、普通の時よりも本能が鋭くなり数倍強くなっている。それだけならまだいい。さらに、憎悪が心の割合をほとんど占めていると思われる。やっぱり、憎しみや怒りは、通常の凶りきれない力が生まれる。もう、『普通』には戻れない領域に達している。

「つく!」

そんな攻撃を側転で何とか避けきることに成功した。靴にちよつかする攻撃。俺は、油断した。『かすったぐらいじゃあ大丈夫だろう』と。しかし、そんな憶測は所詮憶測だった。

「がああ!!」

ちよつとかすった靴は吹っ飛び、俺は、三回転ほどして地面に付い

た。そう『かすっただけ』という憶測は『人間』だけに通じるもの。ライジは、もうその域からはみ出している。そう、『すでに人間ではない』。

「大丈夫か！」

キジが叫び、ライジに向かって飛び蹴りを放つ。俺に氣をとられていたライジは、『人間の器』なため吹っ飛んだ。

「ぐ、かすっちまった。」

「立てるか？」

「ああ。」

足に激痛が走る。青くなっているに違いない。が、そんなことで立てないなんてハンターは甘くない。そんなのを引きずっている人が待っているのは死だ。

「ああああ！！カスどもが！！」

ライジは、キレた様に立ち上った。そして、キジにめがけてパンチを放った。が、軽々とパンチをキジによって避けられた、地面へと激突した。地面は、彼の生き良いを受け止めきれずひびが入った。

「てめえら！呑気に話してんじゃねー！！」

ライジの檄が飛ぶ。

「やつば、すげえ力だな。」

「ああ、『巻物』を使ってもあそこまでは無理だな。」

「やつば、『巻物』使わんとちときついか。」

キジも限界を感じているらしい。

「じゃあ、どっちがいく？」

「祈祷、お前言ったほうがいいかもしれん。」

「なんで？」

「俺よりお前の方が読む時間短いし。」

「わかった。じゃ、足止めよろしく！」

俺は、できるだけ明るくいった。ポーチから『巻物』を取り出しながら遠くに逃げた。

「ふん。早くしろよ？」

後ろで、小さい声が聞こえた。

「お前俺を舐めてんのか？」

「は？お前なんぞ俺一人でもいけるわ」

「・・・こんな操られるほどの精神の持ち主が俺らに勝るなんて思えんがな。」

「くそがあ！てめえ、防戦一方の癖に舐めたことってんじゃねえええ！！！」

そんな声に、ついカチーンと来てしまう。

「黙れ！お前の攻撃当たれて居ないくせに！」

「がああああ！！！」

第二ラウンドが始まった。

「いくよ、京子ちゃん！」

「おう！」

私と京子ちゃんは作戦会議を終えた後、自分の集中力を高めていた。これからやる事は、いつもと違ったことをするし気を引き締めなくてはならない。

「いたわ！1時の方向よ！」

「OK！」

私は、自分の本能をできるだけ鋭くしながら、奴の所に向かう。『土』の能力は、京子ちゃんの『風』や祈祷君の『水』と違って地面に触れなくてはならないから不便だ。『風』に乗って、上に上がっている時点で私の能力は無意味。だから、集中して能力を使っている京子ちゃんの目になって上げなくてはならない。

「目標がこちらに気付いたわ！」

「じゃあ、足止めしないとな！」

京子ちゃんは、カッと目を見開き闘志を剥き出しにした。その瞬間、京子ちゃんの手に『風』が集まっていくのが分かる。『巻物』を使うものだから分かるのかもしれないが、なぜか『力』の集まり具合が直感で分かる。

「はあ！」

そう言っただけに見えるカッターを獅子にぶつける。だがキン！という金属音とともに防がれてしまった。だが、ここまでは計算のうちだ。

「じゃあ、行くよ！」

京子ちゃんの掛け声とともに『風』の板から下りる。

「よし！」

私が、合図のような声をだす。獅子は、降りたり上がりたりしていて混乱気味だ。

「今よ、京子ちゃん！」

「うん。」

合図と同時に術を出す。私は、『上』から、京子ちゃんは『下』から。

「！！！！！」

「あなたは、私たちを馬鹿にしすぎよ。あなたの近くにトンネルを掘って、そこに京子ちゃんの『風』が通れば簡単にこんな事出来るわ。」

「そうそう。俺の『風』にリンの『土』をプラスさせれば何処でも運べるっつーの！」

「な！しまっ！」

ドカーン！

私と京子ちゃんが放った攻撃が見事顔に命中した！

「よっしゃ！」

「やった・・・！」

私たちはついがガッツポーズを同時にしてしまった。

「でも、リン。なんであれが食らうってわかったの？」

「ネメアの獅子の目にダメージが残っていたでしょ？」

「うん。」

「アレは、最近出来たあとだった。だから、多分だけ祈祷君がつけたんじゃないかなって思ったの。」

「へえ。」

「それに、弱点があるみたいなの。」

「弱点？」

「『魔獣』と呼ばれる種族は、本来『知能』と『本能』が兼ね備えている種族とされているわ。一見強そうに見えるけど、実は、そうでもないみたい。『本能』とは、動物個体が、学習・条件反射や経験によらず、生得的にもつ行動様式。特に防御本能は、生死に関わる大切な機能でしょ。でも、その機能は獅子の頭の中でとても壁が出来てしまう事になるの。『知能』という名の壁がね。人間のようには物事で、考えようとする生物と違い、『野生』という名の社会で生きているネメアの獅子にとって『本能』が強くなるはずなのよ。でも、さっきの感じを見てみれば分かるように物事で考えてしまっているの。まるで、人間みたいだね。本当は、『本能』で動く生物なのに、『知能』で考えてしまう。そんなことしていたら、二つの考えが同意に起きて、錯乱してそまう。その錯乱のせいで思考が一時的に止まるのは必然なの。」

「???」

「どうやら、京子ちゃんには、理解できていないみたい。」

「簡単に言えば、馬鹿だから私の罠にはまったの。」

「ただの馬鹿じゃん。」

「そうだよ。」

あんな攻撃、本当ならバックステップか、サイドステップで避けられるもの。でも、出来るはずが無かった。『知能』がそこの生物より良いからって、馴れない頭を『人間みたい』に使って考えなが

ら行動しようなんて無理に決まっている。下手に頭を使わなかったら、『本能』というなの『生き抜く力』が私たちを飲み込んでたかもしれない。

「じゃあ、リン。祈祷のところにいくか！」

「京子ちゃん！『いくか』じゃなくて『いこうよ』でしょ！」

「気にしない。」

「気にしなさい！」

そう言つて、獅子に背を向けた。が

「ぐ……るる！」

「……！！！」

奴は、口からものすごい量の血が出ていた。しかし、それを感じさせない感じで立ち上がった。

「くっ……！！！」

油断した。ちゃんとトドメを刺せたか確認しとくべきだった。緊張と解けてしまった瞬間、『巻物』の効果も切れてしまっている。京子ちゃんも予想外だったらしく、『巻物』の効果も切っていた。

「グルル……浅はかな娘どもだ。我があの程度で死ぬとも思つたか！」

ネメアの獅子は、ゆつくりと近づいてくる。この距離じゃあ、『封字』を読む時間は絶対に足りない。しかも、ダメージはあるとはいえこの余裕。私たちを食らうくらいできるであろう。

「京子ちゃん！私が、相手をするわ！祈祷君たちを呼んできて！」

「そ、そんなこと！」

京子ちゃんは、声を震えながら叫ぶ。

「それでも、年長者よ。最後までいい事してあげたいじゃない。」

「……っ。」

京子ちゃんから涙が流れそうになる。

「はやく！」

「……絶対生き残っていてね！」

「わかった。」

そう言つて、京子ちゃんがダッシュしてこの場を立ち去る。

「ほほお、チーム愛か。」

「『魔獣』の癖に氣使つてくれてありがとう。」

「我は、器が大きいのでな。あの小娘はお主の覺悟に免じて助けてやるわ。」

「そう、それは良かった。」

「では、おとなしくしとれば楽に逝かせてやるぞ。」

「あらあら、余計な心配はしなくても結構よ。私、抵抗しないなんていつ言つたのかしら？」

そう言つて、バックの中から、コンバットナイフと、長剣を取り出す。そして、右手には長剣。左手には、ナイフ。これが、私のスタイル。両利きの私には、もってこいのスタイル。だけど、この魔獣^{バケモノ}には皆無。うまくいっても相討ち。悪ければ、何にも出来ずに死ぬ・・・それだけは、避けたい。どうせ、終わるのならこの『魔獣』を退治しよう。そう心に決める。

「はあああ!!」

私は、長剣を大きく振り上げ奴を斬つた。が、キンという音と共に空しく折れてしまった。

「ふん、こんなもの効かぬわ!」

がはは、と大声で笑い始めた。その声で、ぜんまいのねじが切れた人形のようにガクンと地面に膝をつける。

「最後の抵抗もこの程度。やはり、人間なぞ弱きものよ!」

「くつ。」

分かつてはいた。だが、現実を突き付けられるは、ここまで悲しいものなのか。ナイフほどまで折れてしまった長剣を見て、いろんな思い出が走馬灯のように駆け抜けた。

こんな風に思うなんて死ぬ前のようにだ。

いや、死ぬ前なんだ。

「あはは・・・。」

つい、笑いが出てしまう。きっと、実感がないからだろう。

「では、地獄でな！」

そう言っつて、奴は手を振り上げ爪を立てる。逃げれるわけも無く、頭が真っ白になって目をぎゅっと瞑った。

私は、ここで気を失ってしまった。

序章：始まり（中）（後書き）

こんにちは、作者の封雷光です。

まずは、更新について読者の方に深く謝罪したいと思います。楽しみにしてくれている読者の方々すみませんでした。正直いつて、テストやら何やらで更新が伸びに伸びこんなに遅くなってしまいました。

この小説は、本気で書いています。ので、このような自体が再度起きるかもしれませんが、必ず更新します。ので、最後までお付き合い頂けたら幸いです。

序章：始まり（下）

目覚めると、空は黒く月が独特の光を放っていた。

「あ・・・れ？」

「起きたか、リン。」

「きじ？」

「大丈夫かよ、リン。」

「京子ちゃん？」

「どうやら大丈夫なようだな。」

京子ちゃんは、いつもの口調でしゃべる。そういえば、私は、どうして寝てたんだろう？そう考えながら、ぼーっとする。しかしそれも時間が経つにつれて頭が覚醒してくる。ネメアの獅子と戦って、京子ちゃんを逃がして・・・あ！

「あれ？私なんで生きてるの？」

そつだ、私恐怖で途中で気絶しちゃったんだ。

「それは、祈祷が助けに入ったんだ。」

「え！」

そういえば、祈祷君が居ない。

「じゃあ、祈祷君は何処に？」

「奴ならリンの後ろにいる。」

「き、祈祷君？」

それを聞いて振る向くと、祈祷がかなりの傷があつた。右手と右肩に包帯が巻いてあり、どちらも重症。あとは、頭、左足にも巻いてあるが大丈夫そつだ。でも、どうしてこんな事に・・・。

「俺と祈祷は、ライジと戦つてたんだ。」

キジが、焚き火の火を強めようと枝に火の中に入れる。私の顔を見て気遣つてくれたのだろうか？

「その中で、祈祷は足を怪我したんだ。『普通』なら、大丈夫だつ

たんだがライジは、ネメアの獅子の力でかなりの力を増大させていたんだ。それで、祈祷は足にダメージを負ってしまったんだ。」

「……。」

「そこで俺は、祈祷に逃げてもらおうと、『巻物』を詠んでくるようにいったんだ。その後は、」

俺は、数時間前のこと思い出し始めた。

「グアアアー！」

ライジが大分可笑しくなってきた。そうだな、『魔獣』に近づいてきたと言っても過言ではないだろう。

もう、人間とはいえない。それだけは、分かる。だけど、数十分前に出会ったとはいえ元人間だったのだ。心の中で大きな渦が出来ていることは把握できた。

「ライジ！目覚めろ！」

頭の中が真っ白になっていた。気付いたら、そんなことを叫んでいた。なぜ、叫んでいたが自分でも分からない。今のライジの姿と数十分前の姿が心の中で重なる。目を瞑りたくなるような事実。でも、目を背けてはいけない。前の頃のライジの意思が、違うからだ。俺は、覚悟を決めた。

「お前の心の中の敵を倒してやる！」

俺は、決闘の時に叫ぶように言い放ち、バックから愛用しているトンファーを取り出す。短いく、一見頼りないような刃物は今の俺の命を左右する剣だ。が、俺が構えた瞬間、ライジが頭を抱え、後ろに吹っ飛んだ。

「があああああー！！！」

ライジの悲鳴が、森に響き渡る。

「ぐああああー！！！」

ライジは、地面にしがみ付きはじめた。

「げる・・・はあ！」

ついには、訳の分からない言葉まで発しはじめた。どうしたんだろ
うか？

「グルル・・・浅はかな娘どもだ。我があの程度で死ぬとも思っ
たか！」

「どういうことだ？俺は、男・・・そうか！」

「リン！」

俺は、気付けば俺は走っていた。勿論、ライジの時に集中力も判断
力もかけてしまっていたかもしれない。でも、気付かぬうちに走っ
ていた。俺は、まだまだ未熟だ、と感じながら・・・しばらく無
我夢中で走っていると、リンが倒れていた。理由は、まったく分か
らない。

「・・・。」

俺は、ただ呆然と何があつたが状況把握ができず、ボロボロと涙を
ながしてしまった。

「くっそ・・・。」

ただ、その一言だけ呟いた。

「その後、京子が祈祷を背負ってここにきてこの状態だ。」

「私はね、『巻物』を詠みきった後にリンの場所に向かったんだ。」

京子は、いつもの口調でいつもどおりに答えた。

「だけど、祈祷が倒れてたんだ。その時には、傷だらけで血が止ま
らない状態だったんだ。」

「・・・。」

リンの目に生気は、見えなかった。

「多分だが、今の状態では祈祷に明日を生きられる力は見えない。」

俺は、無表情で答えた。

「そ、そんな・・・！」

リンは、この世が終わるような顔を見せた。

「今の状態では、だ。せめて、村さえ見つけられれば話は変わる。」

「じゃあ・・・！」

「この森のどこかに村があるはずだ。」

「え？でも、この森自他一日歩けば抜けられるほど小さいんじゃない？」

「それは、一番短い距離で森から抜けた時の話だ。もしも、この森を抜けても、小さな空港しかない。そんな所よりも村の方が助かる確率が確実に高い。」

国というまとまりがなくなった現代では、自分の身は自分で守るのが基本。そんな現代で、医療施設が無いという事は、消滅を意味する。

「30 キロメートルに一つの村があるという原則を元にして、俺らの街を原点とすると・・・。」

そういつて、俺は地面に枝を使って円を書いている。

「でもって、この森は、歩きっぱなしで7時間程度で抜けられる。

俺らの時速は、だいたい4キロほど。だから、一直線だけでも28キロは最低でもあることになる。で、この森は長方形になっているから・・・。」

「・・・。」

「円に入らない部分に村がある可能性が高い。」

「キジ、質問があるんだけど。」

「うん？なんだ？」

「なんで、30 キロに一つの村があるって断言できるの？」

「それはな、一日に村を行き来するにはもってこいの距離だからだ。」

「

「???」

なおも、頭にハテナマークのリン。

「いいか、30キロの間に村が出来てしまうと如何しても、お互い

を干渉してしまうんだ。だから、一日ぐらいは歩いてかかる距離を置いてるんだ。」

「でも、あると言いつつ切れないじゃない。」

「普通は、そうなんだがな。残念なことにはここは『森』だ。いわば、食材の宝庫。そこに人が集まらないなんて不自然だ。」

「でも、人がこの森にきてないかもしれないでしょ？『魔物』がいたわけだし。」

「『魔物』がいるからといって住む場所を選ぶとは思わない。」

「……。」

いつもの如く俺らは数分睨みあう。いつもいつも、何が気に入らないんだ？

「わかった、キジ。」

今回は、リンが折れたみたいだ。

「でもでも、夜動く事は、自殺行為なんだよ？」

「大丈夫、京子もいるし、それにお前だっている。大丈夫だろう。」

「……しかも、見つかるかわからないんだよ？」

「あると信じれば見つかる。」

「……。」

いつもの如く俺らは数分睨みあう。なんだか、既視感が……！

「わかった、キジ。」

「……。」

京が不思議そうだった。

「……さっきリンが言ったとおり夜動くのは自殺行為。気を鋭くし、集中していこう。」

「「おっー！」」

俺らの搜索が始まった。

夜の森は、予想以上に怖かった。ていうか、怖すぎる。道の中にまた未知な道。いつも通っている森には見えなかった。「怖っ！」って思い切り叫びたいのを我慢して進む。後ろの木々がガサガサッと音を出すたびに振り返ってしまう。キジの提案で、一列に並びながら進むことになった俺たちは、どうも寂しさと恐怖でいっぱいうだ。やはり、祈祷がないことで会話が全く弾まない。なんていうか、皆が皆、霊が見えているような恐怖がある。並ぶ順番は、京子、俺、そして祈祷を背負ったキジという順番だ。背後に備えて俺が風の膜をはった。この膜が破れたら、敵の接近が分かる手筈になっている。

「なあ、京子。」

「『なあ』じゃなくて『ねえ』でしょ、京子ちゃん。で、何？」

俺の相方は、なぜか俺の言い方をわざと直してきたが、日常茶飯事なので無視する。

「怖くない？」

「怖い。」

会話終了。どうすればいいか、教えてくれ。だいたい、キジも何か考えたような面つらしているから、とてもじゃないが話しかけられないし！そもそも、もう何時間か歩いているのに、何も見つからないってどういうことだ！

「・・・ここで、一休みしよう。」

「ダメよ、キジ。ここで、休んだら助けられない。」

リンが珍しく緊張感のある声を出す。

「俺がすでにやばいんだ。」

そう言っつて、かなりぐったりしたような顔をする。確かに、やばそううだ。

「わかったわ。」

リンもしぶしぶ、OKした。俺らは、枯葉と木の枝を集め適当に火を起こす。すると、キジが口を開いた。

「リン、夜明けまで、あと3時間程度だ。もしかすると、タイムリミットに間に合わないかもしれない。」

「そんな・・・！」

「重症で、傷は縫って塞いだが、輸血が無い状態。そして、しっかりとした栄養分を与えられていない。このままでは、祈祷の体力でももたないかもしれない。今の状態を見て分かるように、顔が真っ青で、呼吸はしているものの、生きているのがやっとだ。正直、覚悟はした方がいいかもしれない。」

「・・・。」

「・・・。」

思った以上にヤバイ。これは、悪い冗談でもなさそうだ。このやささ、どちらにしても助かる確率は、低い。

「・・・賭けに出てみるか。」

キジが、急にハッとしたようにいった。

「賭け？」

元々、これも賭けでは？

「今から、京子が、『風』を使って俺と祈祷を吹っ飛ばすんだ。」

「！！！」

「そ、そんな事したらキジが死んじゃうかもしれないよ！」

「その時は、その時だ。」

「そんな・・・！」

すごい、キジは意外な顔をしていた。なんというか、依頼を成功させよう、と言う顔。そんな感じ。

「幸い、南西に『テンジースマイル』と言う街がある。そこに居たほうが生還する確率が高い。」

キジの目に迷いは無かった。『テンジースマイル』と言う街は、台湾地区の南西にある。商業の盛んな街で発展していて、とても巨大である。アジア最高峰の街で、台湾地区の半分は、その地域になっている。

「「わかった。」」

俺と、リンが同時に言った。その後、俺は爆発させるイメージを頭の中に叩き込む。

「準備完了。」

俺は、静かに冷静を装った。

「・・・いいか、リン、京子。俺らは、ここら一面から吹っ飛ばして、南に飛ばすんだ。そして、リンたちは、空港にすぐに向かえ。出来れば、オーストラリア地区の『レイトール』に向かって欲しい。」

『レイトール』は、小さい街だが近くにたくさんの空港を所持し、オーストラリア地区有数の場所となっている。

「じゃあね、キジ。」

「・・・ああ。」

「元気だな。」

「お前こそな。」

キジは、ベルトで祈祷を固定し、リンと俺はリンの土に固定された。
「破！ー！！」

俺は、精一杯の力で、キジたちを吹っ飛ばした。それに答えるように森が破壊され、木々が押し倒されていくのが感触で分かった。が、止められなかった。心の中のモヤモヤが、晴れずその憂さを払うために、破壊し続けた。

「京子ちゃん・・・？」

その時のリンの顔は鮮明に覚えている。びっくりしていたと言うよりも、訳の分からないという顔をしていた。

「・・・。」

俺は、終始無言だった。

「どうして・・・？」

リンは、俺に何をしたいのだろう？俺の顔を触ってきた。

「どうして、泣いているの？」

そうリンに問われて初めて分かった。涙が頬を伝っていたのだ。

「・・・。」

その瞬間、このモヤモヤの正体が分かった気がした。

この世はなぜ生まれたのだろう。

最初は、そう思った。でも、この世界に生まれて良かったと思った。誰かを救えるかもしれない力が自分の中にあっただ。それだけでよしとしようではないか。苦勞？そんなものどうした？俺は、決めた。

精一杯、俺の仲間を救おうと。

精一杯、俺の仲間を大切にしよう。

精一杯、俺の仲間と生きよう。

そして、元気な姿で再開しよう！

また、四人で笑いながら・・・。

序章：始まり（下）（後書き）

こんばんは、作者の封雷光です。

今回で、序章は終了です。次から、新章に入ります。

まあ、まだ次の章の構成は全く考えていないので、こまりましたが・
・。まあ、その場で考えますw（オイ）さてと、次はキジとラ
イジを基準にお話を進めていききたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8170e/>

世界の利、僕の利

2010年11月30日03時59分発行